

I P M実践指標モデル（カキ）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
予防	圃場及び樹体の管理	1) 適正な栽植密度を維持することにより、圃地の通風・採光・乾燥を良くして、病害が発生しにくい環境を作る。	適正な栽植密度は薬剤付着を良好にする。	
		2) 低樹高栽培を導入し、病害が発生しにくい環境をつくるとともに、防除作業効率を高める。		
		3) 適正な剪定を実施するとともに、各種病害の被害芽・枝を剪除する。		
		4) 生育期間中は新梢管理を適正に行い、各種病害の発生を予防する。		
	雑草対策	5) 各種の資材や枯死雑草によるマルチ及び機械除草等による除草剤を使用しない雑草管理対策を実施する。	雑草などを利用した草生栽培は雑草管理の省力化のほか、天敵昆虫の温存効果がある。	
		6) 周辺の除草を行い雑草の侵入や種子の飛来を抑制する。		
	耕種的・物理的防除技術の導入	7) 炭疽病対策として、発病葉、枝は見つけ次第除去する。		
		8) アザミウマ類対策として、光反射シートマルチを設置することで飛翔行動を攪乱させ果実被害を軽減する。		
		9) 果樹カメムシ類及び果実吸蛾類対策として、黄色灯の夜間点灯による圃地への飛来忌避及び被害軽減を図る。		
		10) 冬期に各種害虫の越冬場所となっている粗皮を削る。		
		11) ネットや防風垣を設置し、強風等による傷の発生を防止することで、病害の発生を助長させないようにする。		
		12) 病害虫の発生源となる落葉などの残渣の除去を確実に行う。また、落葉はトラクターで埋め込む。		
判断	防除の要否の判断・病害虫発生予察情報の確認	13) 定期的に圃内を見回り、各種病害虫の発生状況を確認する。		
		14) フジコナカイガラムシ対策は、幼果に寄生が確認された時点を防除適期と判断する。		
		15) 生育ステージや気象に応じた防除を実施するため、病害虫防除所が発表する発生予察情報等を入手確認する。	病害虫防除所のホームページアドレス http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo	
防除	農薬の効果的な利用	16) ハダニ類、カイガラムシ類対策として、冬期発芽前までにマシン油を散布する。		
		17) 農薬を散布する場合には土着天敵に影響の小さい選択性薬剤を選択する。		
		18) 当該地域で強い薬剤抵抗性の発達を確認されている農薬は使用しない。		
	農薬の使用全般	19) 対象病害虫・雑草に応じた薬剤の選定を行う。		
		20) 発生状況に応じて十分な効果が得られる範囲で必要最小限の使用量となる散布方法で実施する。		
		21) 農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置（防除機器、剤型等）を講じた上で使用する。		
その他	作業日誌	22) 農薬を使用する場合には、抵抗性発達を回避するため特定の成分のみを繰り返し使用しない。		
	I P M研修会等への参加	23) 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。		
		24) 県や農業協同組合等が開催するI P M研修会等に参加する。		